

のかも知れないが——。

もつとも、この『遠野物語』については、次には、これまで大切に育ててきた『遠野物語』の成立過程を、広く世に問うてみようか』([あとがき])とある。まずは、口承芸の文献学的研究の推進者の手になる本書がまとまつたことを喜び、今後の口承芸研究に、大いなる広がりがもたらされることを期

書評

中原ゆかり著

『奄美の「シマの歌』』

酒井正子

本書は奄美大島笠利町佐仁の集落(シマ)を対象とした、歌謡・芸能伝承の民族誌である。著者の中原ゆかり氏は一九八一年以来奄美大島全域をフィールドに、三昧線歌の現代的変化に関する民族音楽学的な論考を発表してきた。しかし個別のアプローチではとらえきれない「シマ意識と歌」という大問題に、学位論文(総合研究大学院大学、民博)として正面からとりくんだ意欲作が本書である。集中的な集落調査は八七〇九年に推定のべ十三ヶ月、うち初年度は七ヶ月間の長期滞在

待したい。

書評というより、新刊紹介程度しか書けなかつたことをお詫びし、読者諸氏には、直接手に取つて読まれることをお願いするものである。

(大修館書店・本体二三〇〇円)
(ねぎしひでゆき／市川市中央図書館)

奄美のシマの小宇宙としての求心力が本書に結実したことを喜ぶ。

全体は八章及び結論からなり、核心である「八月踊り」には後半の四章を割いている。

第一章「序論」。問題の所在、研究方法と研究史、意義などが述べられる。まず、伝承歌

謡のエスノグラフィーを作成し「人々の心に存在する『シマの歌』を明確にする」ことにより「イメージとしてのシマを明らかにする」(一頁)という研究の目的が示される。シマとは生まれ育った故郷の村落・集落をさす。

伝承歌謡(いわゆるシマウタ)はシマごとに微妙な差異があるが、本書でいう「シマの歌」とは、

・歌を通じてシマを意識する概念(三頁)
・シマ人たちが歌を通じて描くシマのイメージ(三六頁)

であるとして、実態(音響)としての伝承歌謡とは区別される。さらに、

・シマの歌という概念のうちには、自分たちのシマの歌を理想化するという心の働きまでがふくまれる。それは、常に自分たちのシマの歌が奄美の中心に位置し、なおかつ奄美で最も優れているというものである。

(七頁)

と説明されている。

冒頭でメリヤムを援用しつつ「シマの歌の概念」というキー概念が示され、注で「伝承歌謡が自分たちのシマのものであり、自分のシマの歌こそが奄美の中心に位置する最も素晴らしいものであるというシマの人々の意識」(四二頁)と定義される。すると、これは「概念」というよりはむしろ「帰属意識」と美意識・価値意識が不可分に結びついた「意識」なのではないか。このあたり概念・イメージ・意識といった用語が錯綜し、概念規定が明確でない。また「シマの歌の概念」とは「シマの歌」に対する概念なのか、「シマの歌」という概念なのか、概念としての「シマの歌」なのか、用語も非常にわかりにくい。ひとつには「シマの歌」が、現地で通用する民俗用語(フォーラクターム)でもあるからだろう。記述の中でも民俗概念と分析概念が混然となり、両者の関連があいまいだ。さらには「奄美のすべてのシマに共通する普遍的なもの」(一五頁)だと断言するが、その普遍性の根拠はどこにも示されず「著者が歩いた集落やこれまでの報告にある限り」(二四頁)そうだ、という経験的な域を出ていないのも問題である。

ところで、この「概念」自体は極めて興味深いテーマである。私も徳之島の、どちらかといえば鄙びたシマのある古老が、「他シマ(チューシマ)の上手な歌に感心はするものの、いいなあ、と心から思えるのはやっぱり我がシマ(ワキヤシマ)のフシだ。どうしてこんなにも心惹かれるのか、自分でも不思議でならない」としみじみ述懐するのを聞いたことがある。著者は「シマの歌の概念」のもうでは絶対的な価値基準は存在せず、シマどもうし良いところは暗黙のうちに認めて「盗む」。かくして「シマジマの歌を洗練する装置」(一三頁)として働くのだという。ここではいわば文化絶対主義(おくに自慢)と文化相対主義の相剋こそ文化の活力である、といふ普遍的で興味深いテーマが示されており、奄美のシマジマはまさにその実験場のようなものだ。しかしそれが果たして図一(九頁)のように、自分のシマを中心周囲論のごとく他シマが並ぶ構図なのかどうか。やはりこの「概念」はあわてて議論の前提としてしまつという報告は重要だ。第四章では正月の歌の遂行などにおいて、どちらかといえば強制史との関係が気になるところだ。第三章では年齢組織、ニイワク(労働交換、儀礼や芸能の祝いや八月踊りの奏演を組み立てる機能をもつという報告は重要だ。第四章では正月の歌の簡略化が進行するさまがよみとれる。かく珍しい習俗も少なくない。また一九六五年頃、一九七八八年頃を区切りとしてシマの伝統行事の簡略化が進行するさまがよみとれる。かく「さまざまのコンテクストの中で歌を聴き覚えることによってのみ、歌は身体化され、

歌に対する感受性が身についてくる」（一〇〇頁）。一朝一夕にしてシマの歌をナツカシイと感じるシマ人となれるわけではない、と結ぶ。

さて、いよいよ八月踊り。旧八月の折り目儀禮で集落をあげて踊られる輪踊りで、著者のいう「シマの歌の概念」が最も濃いジャンルである。第五章「八月踊りのパフォーマンス」第六章「八月踊りをめぐる語り」第七章「八月踊りの競い合い」第八章「八月踊りとシマの外部」と続き、「血が噴き出してきそうな生きた叙述と分析」（小川学夫氏評）で一気に読ませる。

まず第五章では奏演の技法と形態、及び主

要な機会であるアラセツからシバサンまでの状況が記述される。歌い手が踊り手でもある奏演の特徴として浮かびあがってくるのは、アラシヤゲ（男女入り込みながら当意即妙に歌を掛け合い、旋律を変えつつテンポを極限まで加速する技法）、各人の技量や癖を許容する厚みと余裕のあるスタイル、歌と踊りの所作のサイクルのズレなど、演ずるたびに新たな脈絡が作り出される動的な要素である。

上にある。本書の独創的な部分はむしろ個々人に目をむけた記述や、祭りの裏で進行する様々なエピソードであろう。アラセツからシンガンまで八日間の期間に、各二日ずつ計四日間かけて全戸を踊りまわる。「一曲をアラシヤゲではクライマックスに達することを繰り返し、一軒一軒での踊りと騒ぎを反復しながら集中し、最高潮に達する。さらに合間の日々は踊りに加われなかつた入院中の年寄りの見舞いにあてるというのだ。また踊りの輪の中では技量順に並ぶため、何十年も隣どうし踊る顔ぶれが決まってきて、互いの好み、声の質まで同質化していくという。

外から眺めるだけでは決してわからないこうした内在的な情報は、さらに第六章の「パフォーマンスの評価」「八月踊りと個人の体験」の二節において、シマ人の語り口を具体的に引用する形で明らかにされる。第五章で示された奏演の技法が、個人の語りによって意識して積極的に参加する。芸の洗練に限りなく、その奥深さを感じるのは「シマのみに刻み込まれ、人々は八月踊りを『シマのもの』であると同時に『自分のもの』である」との結論に達する。

第七章と第八章は、外部との関係でシマ意象が発見され発明される、という現代的な問題だ。また心情に関する語りも細やかだ。歌と太鼓と足のステップのリズムのかねいの結論に達する。

例えば、

……女性の歌に、「ナツカカリュットー（なんてナツカシイのだろう）」と、即興的な男性リーダーのかけ声や、別の男性が

「ケー」という悲鳴のようなかん高い裏声をかけるのを時折耳にする。それは「ナツカシクテたまらなくなつて、身体から自然に出でくる声」だと人々は説明し、「それ

をきけば自分の歌がそんなにナツカシイのかと思い、歌いながら元気がでる」と言う女性の歌のリーダーもいる。（一四六頁）

「踊りがはずむ」（踊る者が一人残らず心から楽しみ、それが踊りの表情となつておのずと現れてくる状態）という理想の境地は、技術の洗練、生活や人柄、人間関係が微妙にからみあってはじめて実現される。また個々の人生ドラマは八月踊りと重ね合せて記憶に刻み込まれ、人々は八月踊りを「シマのもの」であると同時に「自分のもの」であると

生まれ育ったシマ人」なのだ（一六九頁）、と

題を扱っている。第七章は主としてシマの「内なる外部」である、ウンロとマエという二地区の対比を扱う。前者が伝統的な技法を重視するのに対して、後者は「全員が楽しく踊る」という気分を重視し、メンバーも比較的若い。両者の差異は形の上では微少だが、語りにおいて強調され、特に二地区間を越境する人々の意見は影響力を持つ。他への批判は自己の点検につながり、芸と和の両立をめざして一面的な価値評価に陥ることなく常に

語りにおいて強調され、特に二地区間を越境する人々の意見は影響力を持つ。他への批判は自己の点検につながり、芸と和の両立をめざして一面的な価値評価に陥ることなく常に

六頁)。また、舞台と集落行事の踊りの様式は今ところはっきり区別されているという。

歌詞の固定化はついに行われなかつた(二〇

二四頁)。しかし二つの洗練の方向は対立するものではなく、どちらも全員を取り組まれ、「踊りが

はずむ」という理想の境地では一致している

(二二四頁)。

結論では、芸能をとおして平等かつ眞の個性が発揮される「理想の共同体」が作り出さ

れることが確認される。それは「再生産し続

ける豊かなイメージである」(二二五頁)

結論では、芸能をとおして平等かつ眞の個性が発揮される「理想の共同体」が作り出さ

れることが確認される。それは「再生産し続

ける豊かなイメージである」(二二五頁)

すしも明確でない(少くとも大島、喜界島、徳之島の北三島は、同質の音楽文化を共有す

るとみてよい)が、それらすべてを共通の概

念で括ることが妥当かどうか、さらなる検証

が望まれる。また個人の三味線歌のように、

コンクールの価値基準がもちこまれた場合の

「概念」との動的な関係を、次の課題として

は考える必要があろう。

(2)「シマの歌の概念」が自明の前提として

遍ねく存在しており、シマに生まれ育つ者の

みがそれを徐々に身につけてゆく、という本

書で描かれるモデルは、どちらかといえば一

元的でスタティックである。一元的・統合的

であることと多様であることの両立は難しい。

そうした奇跡的な事例としての説得力は持つ

ものの、はたして全員一致の原則が現代社会

台出演といった文字どおりの外部である。八〇年代後半より頻繁になってきたテレビ取材を伝承の機会として活用しつつ、主体的に対応しているのは好ましい。最後に九一年の国民文化祭への出演をとおして、民俗芸能の舞台化というすぐれて今日的な問題がとりあげられる。ここで初めて過疎による伝承への危機感、若者たちの「シマを出たい」という志向が語られ、記述が多元的になる。観客に背をむけて踊る八月踊りを飽きさせずに「みせ」るために、出入りから踊りの所作まで二地

い。

第八章で扱うのは本土のテレビ局取材、舞臺上演といった文字どおりの外部である。八〇年代後半より頻繁になってきたテレビ取材が発揮される「理想の共同体」が作り出されることは確認される。それは「再生産し続ける豊かなイメージである」(二二五頁)と結ぶ。

以上時に、「イメージするシマとは：イメージである」式の記述と論理の堂々めぐり

がみられるものの、迫真的エスノグラフィー

であり、芸能伝承の核心を描いた貴重な成果といえよう。芸能への陶酔・熱中と技巧の洗練が表裏一体であるような、奄美の芸能の特

質とパワーがうきぼりにされている。同時期

に奄美をフィールドとした者として大変面白く読ませていただいた。最後に全体として本

書が提起する問題点をいくつかあげておきた

もの、はたして全員一致の原則が現代社会

でも通用するのか、主導権をとれない若い世代に不満はないのか、ロック、ポップス、演

行事が少なくなつて、本書でも報告さ

れています。シマ社会の求心力が薄れ、
（参考文献）
酒井正子

歌などに親しむ多元文化的な状況との関わりはどうなっているかなど、疑問が残る。

（3）芸能とアイデンティティの関係について。

「人々の強い奄美意識は、他ならぬ伝承歌

謡によってもたらされている」（二二二頁）とい
いきれるかどうか。もちろん伝承歌謡や踊り
はきわめて有力な文化表象だ。しかしシマ意
識そのものは共生的なシマ社会の長い歴史の
中で、歌踊りのみならず多くの儀礼や祖靈祭
祀とともに、血縁・親族関係・労働・贈与
交換の関係などが十重二十重に絡み合って醸
成されてきたものであろう。その中核にある
のはシマ内婚ではないかと私自身は考えて
いる（酒井一九九〇）参照。先行研究への言及
があつてしかるべきだろう。これらは決して
中原氏がいうような「表層」の問題「三七、
二二九頁」ではなく、深層の観念体系に関与
するものである。弔いや選挙が芸能の上演を
左右することも珍らしくない。ただし歌や踊
りをとおして理想の共同体がつくられる、と
いうことの象徴的意味は大きいだろう）。と
ころが七八年頃より青年団が不活発になり、

結果八〇年代をとおして八月踊りがシマ意識
の表象として、それまで以上に強調され意識
されるようになつた。本書をそうした転換期
の記録として読むことはできないだろうか。
つまり芸能がシマ意識（アイデンティティの
より処）を作り出す契機として抜きんでた注
目を集めることになったのは、近年の現象で
はないか、という可能性である（もちろん佐
仁の方たちの芸能にかける意氣込みの素晴らしい
しさはつとに知られてはいるが）。あるいは
「シマの人」だから八月踊りを踊る、という
よりは八月踊りを踊ることにより「シマの
人」になる、という逆転現象の強調である。

一九九〇・四 「死と歌掛けの民族誌—奄美・ 徳之島の目手久集落の事例から」『民族 文化の世界 上』小学館（一九九六『奄 美歌掛けのディアローグ』第一書房に再 録）

一九九三・八 「歌とシマ空間—徳之島・目手
久集落における音楽民族誌の試み—」
『南日本文化』二六、鹿児島短大南日本
文化研究所

（弘文堂、五九〇〇円）

（さかい・まさこ／湘南国際女子短期大学）

近年ではシマの外に移住した出身者の帰郷が
なければ祭りが成立しない、という事例も少
なくない。芸能がもはやシマに閉じこめられ
て存在するのではなく人々の移動の中で成立
する、という文脈での研究は各方面でようや
く始まつたばかりであり、本書はそのための
貴重な布石となろう。中原氏の、伝承者の視
点にたつた今後の研究活動のさらなる展開に
期待したい。